

大輔命婦の人物設定

——『源氏物語』「末摘花」巻における造型の意義をめぐって——

佐藤洋美

一 大輔命婦の登場場面

『源氏物語』「末摘花」巻では、光源氏が末摘花のもとに導かれていく。光源氏を導いたのは大輔命婦という女房であつた。大輔命婦は、「末摘花」巻にのみ登場する女房であり、大きな特徴として、両親を含めて、出自が詳細に設定されることが挙げられる。

左衛門の乳母とて、大弐のさしつぎに思いたるがむすめ、大輔命婦とて、内裏にさぶらふ、わかむどほりの兵部大輔なるむすめなりけり。いといたう色好める若人にてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。母は筑前守の妻にて下りにければ、父君のもとを里にて行き通ふ。〔末摘花〕①〔二六六頁〕

ここではまず、大輔命婦の両親について語られている。母は左衛門の乳母と呼ばれる光源氏の乳母であり、光源氏が大弐の乳母の

「さしつぎ」に思っている人であるとされている。父は、「わかむどほりの兵部大輔」であるが、「末摘花」巻の時点においては、左衛門の乳母と兵部大輔はすでに離縁しており、左衛門の乳母は筑前守の妻となつて下つているという。さらに、兵部大輔については次のようにも語られる。

父の大輔の君は、ほかにぞ住みける。ここには時々ぞ通ひける。命婦は、継母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりを睦びて、ここには来るなりけり。

〔末摘花〕①〔二六七～二六八頁〕
兵部大輔は「ほかにぞ住みける」とあり、すでに左衛門の乳母とは別の女性と関係を持ち、共に住んでいるのであつた。その継母になじめない大輔命婦は「姫君の御あたり」を頼つて末摘花邸に奉仕しているのだという。また、大輔命婦自身については、「いと

いたう色好める若人」であるとき、内裏に仕える女房でありながらも、光源氏も召し使っていることが語られているのである。

『源氏物語』において、これほどまでに出自が詳細に設定される女房は他にいない。今井源衛は大輔命婦を「もつともリアルに内面的な動きを見せる」人物であるとし、大輔命婦の動きが未摘花物語を展開させるものであるとしている⁽²⁾。また、未摘花と大輔命婦との関係性については、白方勝が「女房同然の立場であった」としているが⁽³⁾、坂本共典は「故常陸宮邸で、命婦は未摘花の女房待遇ではない」とし⁽⁴⁾、陣野英則は未摘花だけでなく光源氏に対しても「擬似的な主人」で「中途半端」な関係にあると論じており⁽⁵⁾、大輔命婦が光源氏と未摘花の両者に対して女房の立場になかったことを指摘するのである。また、大輔命婦と物語展開との関わりについては、西郷信綱や陣野英則は「をこ」物語としての未摘花物語が要請した存在であることを論じる。西郷は大輔命婦を光源氏の「乳兄弟」ととらえ、陣野は「視点人物」としての役割に注目するが、ここで取り上げたいのは、大輔命婦が光源氏の乳母の子としてだけでなく、未摘花とも繋がりがるように描かれ、母左衛門の乳母や父兵部大輔の具体的な官職や現在の状況と共に語られているということである。吉海直人は、大輔命婦は「片や源氏の乳母子、片や未摘花の親類という二重構造」をもつ人物であ

り、「その複雑な人間関係が物語展開の契機になっている」と述べる⁽⁶⁾。大輔命婦は「未摘花」巻における光源氏と未摘花の物語を展開させるためには欠かせない存在であるが、それゆえに、他に類を見ないほど細かな人物設定をされていることには、物語上の意味を読み取るべきであろう。

本論では、大輔命婦の出自について父方と母方の両面からとらえ直し、大輔命婦が「大輔命婦」として詳細な人物設定のもとに造型されることの意義を明らかにしたうえで、「未摘花」巻における未摘花物語を拓く女房としての大輔命婦のあり方を考察する。

二 左衛門の乳母の位置

まず、大輔命婦の母である左衛門の乳母について考えてみたい。左衛門の乳母は、光源氏の乳母であるとされるが、『源氏物語』に見える光源氏の乳母としては、左衛門の乳母のほかにもう一人、大式の乳母がいる。大式の乳母については、「夕顔」巻で光源氏が見舞いに行く場面が見える（「夕顔」①一三五頁）が、光源氏が最も信頼し、重んじていた乳母であることが様々な形で描写されている。大式の乳母の子どもとしては、惟光をはじめ、兄の阿闍梨、むすめとその婿の三河守（「夕顔」①一三七頁）、そして少将命婦の存在が見え（「夕顔」①一七六頁）、特に惟光は光源氏に腹心の

従者として仕える人物であった。また、光源氏は、大弐の乳母の見舞いに訪れたとき、幼い頃から大切に思う人々が離れていった中で、養ってくれる人は多くいたものの、大弐の乳母ほど親しく睦ぶ間柄の人はいなかったのと言ひ、「一人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままにとぶらひ参づることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆる」と、大弐の乳母に対する信頼や格別に心を寄せる人であることを切々と語るのである（「夕顔」①一三九頁）。こうして光源氏と心を交わす大弐の乳母を見た子どもたちは、「おしなべたらぬ人の御宿世ぞかし」と、光源氏の乳母となつたことの宿縁のすばらしさを感じるのであり（「夕顔」①一三九頁、藤本勝義⁹や古田正幸¹⁰が論じるように、光源氏と大弐の乳母一族との関係が良好で、極めて親密な関係であることが語られる。一方で、左衛門の乳母については、「未摘花」巻においてその存在が記されるだけであり、大弐の乳母ほどの詳しい描写は見えない。さらに言えば、大弐の乳母が光源氏本人と相對する場面が描かれるのに対して、左衛門の乳母は、すでに光源氏のもとを離れた人物として造型されるのである。

乳母に関しては、とくに親王や皇孫など、皇族に付けられる乳母について『律令』の「後宮職員令」において次のように規定されている。

凡親王及子者、皆給_レ乳母_一。親王三人。子二人。所_レ養子年十三以上。雖_レ乳母身死_一。不_レ得_レ更立替_一。

（日本思想大系『律令』二〇二頁）

この規定によれば、親王には三人、皇孫には二人の乳母が給わせられることが定められ、乳母が付けられた親王や皇孫が十三歳以上になつた場合には、乳母が没しても補充しないとされている。つまり、養君がある一定の年齢に達した後は、乳母は必要な存在ではなくるのであり、特に男君の乳母については、成長にともなつて側を離れることが多いことが指摘されている¹¹。こうしたことをふまえれば、左衛門の乳母が筑前守の妻となつて光源氏のもとを離れたのがいつであるかは判然としないものの、光源氏が元服し、成長した後のことであれば、全く問題はなかつたと考えられるのである。

しかしながら、吉海直人は、左衛門の乳母が筑前守の妻としてすでに下つていふことについては、養君が成人した後の乳母の行動は自由だとしつつも、「乳母の論理からすれば、やはり離反は養君に対する裏切り行為とみることができる」と述べ、光源氏から見ても、左衛門の乳母には大弐乳母ほどの愛着はなかつたことを論じている¹²。このことは、左衛門の乳母が「さしつぎ」と語られることとも関連してあろう。「さしつぎ」については、二番

手以降を指す語であるところえられ、「一番との差は歴然としており、決して一番を脅かすような存在ではなさそう」であるともされ、マイナス評価が含まれた語であると論じられている。¹³⁾ 光源氏の言動から考えても、左衛門の乳母は大弐の乳母ほどの重んじられ方ではなかったことがうかがえるが、それでも、一度は光源氏の乳母として選ばれた女房であり、その選定には、父たる桐壺帝の意向も反映されていたであろう。

そもそも乳母は、典侍との強い関わりが指摘される女房でもあり、親王の乳母として仕えた女房は、養君が即位する折には典侍に任せられる例が多く見えることが多くの論考によってすでに指摘されている。¹⁴⁾ 角田文衛は、「天皇は最も信頼のおける乳母を典侍に抜擢し、功績によって三位に叙し」たと論じており、平安朝に見える天皇の乳母たちの多くは、養君が成長した後には後宮の中樞を担う女房として活躍する人々だったのである。しかしながら、「未摘花」巻で大輔命婦が登場する折には、すでに筑前守の妻として下っていることが語られている。光源氏はすでに臣籍に降下しており、大弐の乳母が尼として生涯を終えようとしている描写をみても、光源氏の乳母たちが後宮で重んじられる可能性はすでになくなっていたと考えられよう。

左衛門の乳母と同じように、受領の妻として下る乳母の例とし

ては、『枕草子』における「御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに」の章段が思い起こされよう。ここでは、定子の「御乳母の大輔の命婦」が夫と共に日向に下ることになったことが語られ、別れるとき、扇に定子自身の手で歌を書いて贈る（御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに）¹⁵⁾。その歌は「あかねさす日向に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらむと」と詠まれ、「日向に向ひて」に日向をかけ、「ながめ」に長雨と物思いの意味を響かせたものであり、定子が受領の妻となつて下る自らの乳母との別れを惜しみ、主従が心を交わす場面として描かれているのである。また、『源氏物語』においても、匂宮の乳母が下る例もある。

「絵師どもなども、御隨身どもの中にある、睦ましき殿人などを選びて、さすがにわざとなむせさせたまふ」と申すに、いとど思し騒ぎて、わが御乳母の遠き愛領の妻にて下る家、下つ方にあるを、「いと忍びたる人、しばし隠いたらむ」と語りひたまひければ、いかなる人にかはと思へど、大事と思したるにかたじけなければ、「さらば」と聞こえけり。これを設けたまひて、すこし御心のどめたまふ。この月の晦日方（晦日方）に下るべければ、やがてその日渡さむと思し構ふ。「かくなむ思ふ。ゆめゆめ」と言ひやりたまひつつ、おはしまさんことはいとわりなくある中にも、ここにも、乳母のいとさかしければ、

難かるべきよしを聞こゆ。

〔浮舟〕⑥一六二〜一六三頁

匂宮は、浮舟を引き取るうとする薫の計画を聞きつけ、その前に自分が奪ってしまおうと考える。その時に隠す場所として選ぶのが、受領の妻となった乳母の家であった。この乳母の夫である受領は、三月末ごろには下る予定であるとし、ここでも、匂宮という皇族の男君の乳母が受領の妻となつて下ることが見えるのである。『枕草子』の「御乳母の大輔の命婦」は下向する折に定子が別れを惜しむ様子が描かれるが、光源氏や匂宮の場合にはそうした描写はなく、むしろ乳母が下るといふ事柄だけが書かれているような印象を受ける。こうした差は、すでに指摘されているように、養君が男性か女性かによつて乳母との距離感に違いが生じることとも関わりと考えられるが、皇族の乳母として遇されていた女房であっても、養君が成人した後にはその役目を終え、受領の妻として遠国へ下るのは、稀なことではなかったといえよう。また、乳母ではなくとも、『落窪物語』においてあこぎの叔母が「宮仕しけるが、今は和泉守の妻にてあたりける」人であると語られる（『落窪物語』巻之一、五〇頁）¹⁷。ほか、『源氏物語』でも浮舟の母である中将の君が八の宮のもとを離れた後、「陸奥国の守の妻」となり、後にはその夫が「常陸になりて下りはべりにける」とされる（「宿木」⑤四六〇頁）ように、宮中の女房や皇族の女房とし

て出仕していた女性が受領の妻となつて下る例は見える。こうした例をふまえてみると、「未摘花」巻において、光源氏の乳母であった左衛門の乳母が役目を終えた後に下るといふ設定についても、自らの身を保つたための一般的な事柄としてみられていたことの反映と考えられるのである。さらに、浮舟の母の中将の君がその出自の高さを指摘されるように¹⁸、こうした女性たちは、もとは皇族や上流貴族たちに仕え、政権の中枢との繋がりを期待された人々でもありながら、都から離れていく人々として描かれているのであった。

三 兵部大輔の位相

一方で、大輔命婦の父は「わかむどほりの兵部大輔」であると記されている。

兵部大輔は兵部省の官人である。兵部省は「内外武官についての考選・補任などの人事、全国の兵士・兵器の管理、また城隍・烽火などの軍事施設の管理」に携わるほか、「兵士の差発にも関与し、武事関係の年中行事にも携わるなど、兵政全般」にわたって掌る役所であった。¹⁹「職員令」によれば、卿一人、大輔一人、少輔一人、大丞一人、少丞二人、大録一人、少録三人、史生十人、省掌二人、使部六十人、直丁四人が配され、兵部大輔の官位は「正

五位下」であつた。⁽²¹⁾『官職秘抄』では八省の卿について「已上必以「親王」任之」と親王が任ぜられるとするが、誤りであるとの指摘もあり、『職原抄』では次官である大輔について「民部、治部、兵部名家執之」と名家の人々が任ぜられるものであつたことが記される。⁽²²⁾兵部卿と兵部大輔は「古来の武門大伴・佐伯両氏のみならず、藤原氏をはじめ有力貴族の競望」する地位であるとされ、森田悌によれば、「軍政の要に当たり本来は重要な官司であつたが、やがて実質的権限が太政官へ集中するようになり、平安期に入ると形骸化の傾向を強くし」たことで兵部卿は名譽職化し、「兵部大少輔も地下諸大夫でなく名家出身の者が多く任用された」という。⁽²³⁾

兵部卿と兵部大輔については、渡辺由紀が延喜元年（九〇一）から治安元年（一〇二一）までの間に任ぜられた人物をまとめているが、改めて新訂増補国史大系『公卿補任』（吉川弘文館）と本田伊平編『平安時代補任及び女人綜覧』（笠間書院、一九九二年）を参照し、大日本史料総合データベース・古記録フルテキストデータベース（東京大学史料編纂所）を使用した古記録類に関する調査の結果も合わせて、「兵部大輔補任表」としてまとめた。本論では、『源氏物語』が背景とする時代における兵部大輔の任官状況をとらえるために、醍醐朝から一条朝に限って掲出した。

醍醐朝から一条朝における兵部大輔としては、八名を確認する

ことができた。⁽²⁶⁾兵部大輔は名家出身の者が任ぜられることの多い官職であつたが、①源宗子から⑤由道王までは天皇の孫にあたる人物たちであり、親王の子も多く見える。また、中でも①源宗子や③源清平は源氏姓を賜つて臣籍降下した人々であり、国守を歴任した後、正四位下にまで至つてはいるものの、皇族としての立場を維持できずに皇籍を離れた人物たちが任ぜられるという様相が見える。一方で、⑥藤原兼家、⑦藤原実成、⑧藤原兼隆は後に政治の中核で活躍する人々である。⑥藤原兼家は道隆・道兼・道長らの父であり、摂政・関白として政務の実権を握る地位まで上り詰め、⑦藤原実成や⑧藤原兼隆も正二位に至る。この三名のその後の出世の様相を見れば、兵部大輔は出世の過程で若い頃に任ぜられる官職の一つともとらえられるが、兵部大輔に任ぜられたときの心象を考へるうえで注目したいのが『蜻蛉日記』における兼家に関する次の記事である。

……少納言の年経て、四つの品になりぬれば、殿上もおりて、司召に、いとねぢけたるものの大輔などははれぬれば、世の中をいとうとまじげにて、ここかしこ通ふよりほかのありきなどもなければ、いとどかにて二三日などあり。

（『蜻蛉日記』上巻、応和二年五月、一二二頁）⁽²⁷⁾
兼家は兵部大輔に任ぜられた後、「世の中をいとうとまじげ」に思

21 大輔命婦の人物設定

【兵部大輔補任表】

※以下の表は、醍醐朝から一条朝までに見える兵部大輔をまとめたものである。

※作成にあたっては、新訂増補国史大系『公卿補任』（吉川弘文館）、本田伊平編『平安時代補任及び女人綜覧』（笠間書院、一九九二年）、『平安時代史事典』（角川書店、一九九四年）、大日本史料総合データベース・古記録フルテキストデータベース（東京大学史料編纂所）を参照した。

⑧	⑦		⑥	⑤	④	③	②	①	
藤原兼隆	藤原実成	藤原忠輔	藤原兼家	由道王 (源由道)	忠望王	源清平	源嗣	源宗子	人名
藤原道兼男	藤原公季男	藤原国光男	藤原師輔男	仁明天皇孫 本康親王男	光孝天皇孫 是忠親王男	光孝天皇孫 是忠親王男	嵯峨天皇孫 源融男	光孝天皇孫 是忠親王男	出自
長保三年（一〇〇二）正月二十四日	長徳元年（九九五）正月十三日	天元三年（九八〇）六月一日条に見える	応和二年（九六二）五月十六日	承平六年（九三六）四月七日、天慶六年（九四三）十二月二十四日条に見える	延長八年（九三〇）二月十二日条に見える	延喜二十三年（九三三）正月十二日	延喜十一年（九一一）六月十五日条に見える	延喜五年（九〇五）正月十一日	任官年月日
『公卿補任』	『公卿補任』	『御産部類記』には「兵部大輔藤原忠輔」とある（天元三年（九八〇）六月一日条）が、『公卿補任』で確認できるのは兵部少輔（天延四年（九七六）六月十六日）と兵部卿（寛弘五年（一〇〇八）十月三十日）のみであり、兵部大輔に任官されたことは見えない。	『公卿補任』	『九条殿記』（承平六年（九三六）四月七日条・天慶二年（九三九）六月二十九日条）および『本朝世紀』（天慶元年（九三三）十一月十日条・天慶五年（九四二）四月七日条）には「由道王」とあり、『日本紀竟宴和歌』（天慶六年（九四三）十二月二十四日条）には「源朝臣由道」とある。	『西宮記』	『公卿補任』	『伏見宮御記録』、『尊卑分脈』には、「副」という名で載り、「従四下兵部大輔、母、或嗣云々」とある。	『三十六人歌仙人伝』	出典・備考

い、他の所に出て行くこともせず、道綱母のもとにばかりいるという。「いとねぢけたるもの大輔」については、「出世コースでないポストだからであろう」とされ、高橋照美は応和二年（九六二）頃の兼家の任官について、有名無実化していた閑職ばかりに任ぜられていることを指摘する。²⁹⁾『大鏡』兼通伝では「この殿たちの兄弟の御仲、年頃の官位の劣り優りのほどに、御仲悪くして過ぎさせたまひし」と記され（二三四頁）、³⁰⁾兼通の息子たちの間でも出世に差がついていることから、兄弟仲を悪化させることに繋がっていることが語られるほどであり、『蜻蛉日記』において道綱母が兵部大輔を「かの心もゆかぬ官」と評すように（上巻、応和二年五月、一一一頁）、兼家にしてみれば、兵部大輔に任ぜられることは不本意でしかなかったであろう。さらに、兵部大輔からの出世については、『うつほ物語』において、正頼の五男である源顕澄が「右衛門督に兵部大輔、『いと難くなり給へり』と、世に言ふ」と記され（「国譲・下」七六三頁）、³¹⁾兵部大輔から右衛門督への昇格については難しいことであったとされている。平安朝の兵部大輔を見ても、⑦藤原実成が右衛門督に任ぜられた例はあるが、それは寛仁元年（一〇一七）のことであり（『公卿補任』、長徳元年（九九五）の兵部大輔任官から二十二年が経った後のことであった。しかしながら、そもそも右衛門督に任ぜられることについて

は、竹内正彦が「出世という観点からすれば華々しい栄達の道を歩んでいるというよりは、やや停滞しているといった印象を与えるものであった」と指摘する³²⁾ように、まさに不遇の官職だったのである。

また、兵部大輔の人物像について『蜻蛉日記注解』は「世間的な通念として、兵部省の大輔・少輔などは、その職柄からいっても、固陋で不粹な人物を連想しやすかつた」と指摘し、『落窪物語』に見える面白が兵部少輔であったことも「同じ感覚に基づく」例として挙げている。³³⁾史上の兵部大輔については、渡邊由紀が⑦藤原実成は長元九年（一〇三六）に太宰府の曲水宴において閨乱事件を起こし（『公卿補任』）、⑧藤原兼隆は既舎人を殺害させる（『小右記』長和二年（一〇一三）八月一日条）などしていることから、兵部大輔に対して良い印象を抱くことは難しく、「風変わりで癖のある人物」が任ぜられる兵部省自体が「変わり者の集う役所」という印象が生じた³⁴⁾と論じている。兵部大輔はこうした印象を抱く官職だったからこそ、『蜻蛉日記』では「いとねぢけたるもの大輔」と記されたのであり、兼家が兵部大輔に任ぜられた後の態度がそれを如実に表している。

以上のことをふまえてみると、兵部大輔に任ぜられることは、天皇や親王の血筋であっても皇籍に残ることはできない人々が担

う官職という印象を与え、一方で、政治を担う官僚の道を進む人々にとつても不遇の地位であつたといえる。また、「兵部大輔」という官職につく人の人物像としては、風流人を思わせることもありつつ、変わり者で好ましくない官職という印象すら抱かせる役職であつた。

四 『源氏物語』における「兵部」

『源氏物語』に見える兵部大輔については、池田亀鑑『源氏物語事典』の「作中人物解説」において挙げられているのは大輔命婦の父ひとりであるが、兵部卿宮の項には、紫の上の父である式部卿宮、光源氏の弟宮である蛭宮、今上帝の皇子で光源氏の孫にあたる匂宮の三人が挙げられている³⁵⁾。史上の兵部卿については、延喜元年（九〇一）から寛仁五年（一〇二一）までの間に任ぜられた兵部卿十八名について、「風流人と呼べる人物」が多かつたことに加えて、「閑職であるがゆえに政治的に不遇な立場の人物が、兵部卿に追いやられた場合もあつた」とする指摘もあるが、『源氏物語』に見える兵部卿はどのような人物と位置づけられるのであるうか。「賢木」巻には次のような描写がある。

兵部卿宮も常に渡りたまひつつ、御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、いまめかしき御あはひどもなり。

（「賢木」②一四三頁）

政治の実権が右大臣方に移つた後、憂悶を深める光源氏のもとに三位中将（もとの頭中将）や多くの君達が集まり、管弦の遊びや懸物をする様子が描かれる中で、「兵部卿宮」も常に参ることが語られ、この宮は管弦の遊びを得意とする人であるという。「兵部卿宮」が誰のことを指すのかは諸説あるとされるもの³⁶⁾、兵部卿宮という立場にある人が管弦の遊びに親しむ人物として語られることは注目されよう。以下、『源氏物語』に見える三人の兵部卿宮についてその人物像を検討してみたい。

紫の上の父である兵部卿宮に関しては、池田亀鑑『源氏物語事典』の「作中人物解説」では式部卿宮として詳細な人物解説がなされているが、この人物は、兵部卿宮として物語に登場する。「桐壺」巻において、藤壺の入内を躊躇っていた母后が亡くなった後、「さぶらふ人々、御後見たち、御兄弟の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさむよりは、内裏住みさせたまひて、御心も慰むべく」として、藤壺の入内を決める（「桐壺」①四二頁）。また、「若紫」巻では、かつて按察大納言の娘のもとに通い、紫の上をもうけていたことが語られる（「若紫」①二二三頁）が、「須磨」「滯標」の両巻では、光源氏と冷えた関係にあつた。「少女」巻に至つて式部卿となり、「この御時にはましてやむことなき御おぼえにておは

する」と冷泉帝の信頼があつく、娘を入内させている（「少女」③三一頁）。この兵部卿宮（式部卿宮）については、今井源衛が実在の式部郷宮為平親王がその源泉になっていることを指摘しており、その理由として、先帝の最上席の皇子でありながら帝位につかなかったことや、後に式部卿宮として世の重鎮となったこと、そして娘を女御として入内させたことを挙げている。この指摘に関しては批判的な見方も多く、他の親王との関わりを指摘する論が出されているもの、星山健は、とくに「真木柱」巻に見える式部郷宮について、為平親王像の投影がなされていることを認め、式部郷宮に「不運の式部卿宮、為平親王の面影」を付与するために重ね合わされたと論じている。⁽⁴⁾

一方で、蛭宮については、「帝位から見放され」た宮であるとの位置づけもなされるもの、⁽⁴⁾人物像に関する描写にも注目されて来た。蛭宮は、帥宮の頃から「いとよしありておはする」人として描かれて冷泉院御前の絵合の判者を務め（「絵合」②三八六頁）、音楽・絵画・書道などに秀でた人物であるとされる（「絵合」②三九〇頁）。兵部卿になった後も朱雀院行幸では琵琶を弾き（「少女」③七三頁）、六条院春の町の船衆では「青柳折り返しおもしろくうたひたまふ」と催馬楽を謡う（「胡蝶」③一六九頁）ように、風流人として描写されるのである。また、白井たつ子が「光源氏の中

年期の「すき」を補完する」役割を担うものであったと論じるが、⁽⁴⁾蛭宮と玉鬘や女三の宮との関わりの中においては、「あだ」なる側面も見出されるようになる。光源氏が玉鬘に対して蛭宮について話す際には、北の方に先立たれた後に独り身となっている蛭宮について、「人柄いといたうあだめいて」と浮気がちな気質であることを語り、通い所も多く、召人などという女性たちも多く仕えているのだという（「胡蝶」③一八〇〜一八一頁）。さらに、「若菜上」巻では、玉鬘への求婚が失敗に終わった後、女性たちを選び好んでいたものの、女三の宮の婿選びに際しては「いかがは御心の動かざらむ、限りなく思し焦られたり」と、心を動かす様子が語られるのである（「若菜上」④三七頁）。こうした蛭宮の描写について、阿部好臣は、求婚の場において「螢宮の滑稽人としての姿が浮上してくる」ことを指摘し、女三の宮の一件では「一段と滑稽人としての有り方を明確にしている」と述べる。⁽⁴⁾

「あだ」なる気質を持った兵部卿宮と造型される人物としては、第三部に登場する匂宮も挙げられよう。匂宮は、今上帝と明石中宮との間の三の宮であり、「総角」巻では「筋ことに思ひきこえたまへる」と次の東宮にする意向が仄めかされる立場でもあった（「総角」⑤三〇三頁）。そのために、母の明石中宮からは「世の中

り」と軽々しい忍び歩きを諫められ(「総角」⑤二七六頁)、「御心につきて思す人あらば、ここに参らせて、例ざまにのどやかにもてなしたまへ」と氣に入つた女性は何人にして仕えさせることを勧められることもあつた(「総角」⑤三〇三頁)。そうした宮宮の「あだなる御本性」(「浮舟」⑥一〇八頁)について、久下裕利は、風流な「御あそびなどもかしようおはする宮」なる兵部卿像を打破し、一転して色好み性を強くまとう存在ととらえつつ、「兵部卿宮の歴代のイメージからすれば、むしろこちらの方が妥当」であると述べる。⁽⁴⁵⁾

以上のように、『源氏物語』に登場する三人の兵部卿宮は、兵部卿であつた頃の紫の上の父や蛸宮のように親王としてみれば不遇な立場に置かれ、帝位からは遠い人物として造型されている一方、その氣質については、風流な人でありながらも好色性を有し、滑らかな姿を見せる人物でもあつた。こうした兵部卿宮像は、同じく兵部省の官人である兵部大輔にも通じるところがあろう。「末摘花」巻に見える兵部大輔は、左衛門の乳母と別れた後、新しい妻のもとに住み、常陸宮の邸には時々通うだけであることが語られているのであり、移り気な色好み性も仄めかされている。そのうえに不遇な立場で風変わりな人物が多いという兵部大輔像を重ねてみると、「わかむどほりの兵部大輔」という描写がされたことだ

けで、その人物像を推し量るには十分だったのである。

五 左衛門の乳母と兵部大輔の女としての大輔命婦

ここで改めて大輔命婦の人物設定について考えてみたい。大輔命婦は、「いといたう色好める若人」であり、光源氏も召し使う女房であるとされる(「末摘花」①二六六頁)。命婦は、宮中に仕える上級の女房であるものの、特定の職掌はなく、『源氏物語』に見える命婦たちも、それぞれが固有の役割を持つて出仕している。⁽⁴⁶⁾大輔命婦については、宮中において、「御梳櫛」に奉仕する女房として光源氏も召すことや(「末摘花」①二九八頁)、台盤所にいる様子が見える(「末摘花」①三〇一頁)。こうした出仕は、大輔命婦の母左衛門の乳母が光源氏の乳母として仕えたこととの関わりが考えられる。

養君が成長して役目を終え、後宮での厚遇が期待できない乳母が受領の妻となつて下る例が見えることはすでに述べたが、受領の妻として下ることについては、末摘花の叔母に関する描写の中で「世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけり」と記されている(「蓬生」②三三二頁)。受領の妻となることは、零落した身の上であることを示すものととらえられていたのであり、叔母は「おのをはおとしめたまひて、面ぶせに思したりしかば」

と末摘花の母に蔑まれたことを恨み、不名誉なことだったのだらうと推し量っている（「蓬生」②三三二頁）。一方で、『枕草子』「位こそなほめでたきものはあれ」の章段には次のようにある。

女こそなほわるけれ。内わたりに、御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば、重々しけれど、さりとしてほどより過ぎ、何ばかりの事かはある。またおほやうはある。受領の北の方にて国へくだるをこそは、よろしき人のさいはひの際と思ひてめでうらやむめれ。

（「位こそなほめでたきものはあれ」三二六頁）
 帝の御乳母は典侍や三位などになると重々しいものの、大方の女性がそうなるわけでもなく、それに比べると、受領の北の方になって任国に下ることは、普通の身分の女性にとつては「さいはひの際」と羨むものであるとされている。大輔命婦の母左衛門の乳母は、光源氏の乳母として典侍になることが期待された人ではあったものの、「末摘花」巻の時点では筑前守の妻となつて下つている。吉海直人は、これが光源氏による乳母に対する報奨行為の可能性を示唆するが、左衛門の乳母が乳母としての役目を終えた後、次なる「さいはひ」を得たことは、光源氏の存在と無関係ではあるまい。それと同じように、大輔命婦自身が宮中に命婦として出仕することについては、光源氏の口利きによるものであると指

摘があり⁽⁴⁸⁾、大輔命婦のみならず、大弐の乳母の娘も少将命婦として出仕していることから、光源氏による後押しがあつたことがうかがえる⁽⁴⁹⁾。とはいえ、大輔命婦と光源氏は、乳母の娘と養君として幼い頃から共に過してきたことが推察されるが、「懸想だつ筋なく心やすきものの、さすがにのたまひ戯れなどして、使ひ馴らすと記され（「末摘花」①二九八頁）、戯れ合うなどの親しさをうかがわせるものの、性的な関係を結ぶような間柄ではなかつたとされる。

しかしながら、大輔命婦の気質としては「いといたう色好める若人」のほかにも、末摘花のもとから他の女性のところに行こうとする光源氏をからかう折には「これをあだあだしきふるまひと言はば、女のありさま苦しからむ」と言つて大輔命婦を浮気な女として扱い（「末摘花」①二七〇頁）、父に黙つて光源氏を末摘花と対面させることを決めたときには「あだめきたるはやり心」を持つ人として造型されている（「末摘花」①二七九頁）。こうした好色性は、兵部大輔である父の造型に通じるところがある。

大輔命婦の父、兵部大輔について本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』において、「常陸親王の御子にて、末摘花君の御せうとの如く聞えたり」といい、兵部大輔は末摘花ときょうだいで、常陸宮の子であると指摘している⁽⁵⁰⁾。その根拠として、兵部大輔が新しい妻

と再婚して他の所に住んでいるという記述を挙げ、わざわざ他の所に住んでいると書くからには、本来はきょうだいとして常陸宮邸に住むべきであるのという意味が含まれていると述べる。一方で、その先の記述においては、「蓬生」巻に至って末摘花のもとに通ってくるのは「御兄弟の禪師の君」だけで、兵部大輔に関する記述がいっさい見えない（「蓬生」②三一九頁）ことから、「御せうとのやうにも聞え」ないとし、「これかれまぎらはしき事也」とまとめている。

こうした兵部大輔と常陸宮の関係性については、先行研究でさまざまに指摘されている。萩原廣道や玉上琢彌⁵¹、新潮日本古典集成は本居宣長の『玉の小櫛』の指摘に従って、兵部大輔は末摘花のきょうだいであるとしてらえている。一方、坂本共典は、大輔命婦は常陸宮の北の方（末摘花の母）や大弐の北の方（叔母）ときょうだいであるとし、常陸宮は後に出て来る齋院（末摘花の乳母子、侍従が仕えている）ときょうだい、この二人は一院の子ども、つまり桐壺帝のきょうだいであるとする⁵⁴。また、吉海直人は兵部大輔が末摘花のきょうだいであることを想定しつつ、親王の子であればわざわざ「わかむどほり」であると記す必要はなく、もし末摘花ときょうだいであったとしても、母親が異なる異母きょうだいで兵部大輔は劣り腹の子であろうと論じる⁵⁵。このように、先

行研究では、兵部大輔と常陸宮がきょうだいであるか否かに関する諸説が見えるが、いずれも物語には書かれておらず、たしかな記述を見ることができないことから、新編日本古典文学全集をはじめとする注釈書では、末摘花の親類という程度の指摘にとどまっている⁵⁶。

しかしながら、兵部大輔が「わかむどほり」であると語られ、皇統に連なる血筋の人物であるとされることは、兵部大輔と常陸宮や末摘花との関係性の深さを示すことに繋がっている。「わかむどほり」は「斜陽族に対する一種の軽い軽侮をこめた言葉」であるとする指摘もあり、かえって皇族の中では格下の人物であるという印象を強める語でもあった。そうした兵部大輔の位置づけは、「常陸宮」の立場とも連関していよう。「常陸」については椰掄の対象となることが指摘されてきたが、常陸の国に任官した人物については、松田豊子が常陸宮のみならず常陸介についても、「中樞勢力をもった公卿が任官する国ではなく」、「上席の常陸太守でさえ政治権力がなかった」と述べるように、常陸の国は、政権の中枢からは外れた人物が任せられる場所であった。つまり、常陸宮と兵部大輔は、皇族でありながらも、宮としては不遇な立場に置かれた人物として共通した人物設定となっているのである。

大輔命婦は、このように光源氏と強い繋がりを持つ母と、常陸

宮家と強い繋がりを持つ父との間の娘として設定されている。光源氏の乳母の娘としての繋がりを持ち、宮中に出仕することが語られることで、光源氏を後ろ盾として出仕する女房としてのあり方が示される。そして、兵部大輔の娘として登場することで、不遇な「わかむどほり」の娘であり、さらに、色好み性を持つ女房であることが印象づけられているといえよう。すでに下った乳母を母に持ち、兵部大輔を父に持つという人物設定は、大輔命婦が宮中で、あるいは常陸宮邸で置かれた立場を明確に示し、この後に登場する女君の物語の展開を予測させるものとして機能しているのである。とはいえ、大輔命婦は末摘花と光源氏の両方と関係を持ちつつも、直接的な主従関係を結ばない。末摘花と光源氏の双方とある程度の距離を保った形で、物語を展開させる役割を担うのである。

六 末摘花物語における大輔命婦

光源氏が末摘花の存在を知ったのは、大輔命婦が伝えたことがきっかけであった。

故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、ものついでに語りまきこえければ、「あはれのことや」とて、御心とどめて問ひ聞

きたまふ。

〔末摘花〕①二六六―二六七頁

大輔命婦は、亡き常陸宮が晩年にもうけて大切に養育してきた娘の心細い窮状を語る。この時点において光源氏が得た末摘花に関する情報は、没落した宮家の姫君ということであり、皇統に連なる女君の話であったからこそ、「あはれのことや」と心を寄せて興味を持つのである。それに対して大輔命婦は、「深き方はえ知りはべらず」と言つて、詳しいことは知らないのだと断つたうえで末摘花について話し始めるのであるが〔末摘花〕①二六七頁、兵部大輔と常陸宮の繋がりと、大輔命婦が「姫君の御あたりを睦びて」通う〔末摘花〕①二六八頁）ことをふまえれば、よく知らないうことはなかったと考えられよう。大輔命婦は、末摘花の烏澁なる側面を光源氏に伝えることなく、宮家の女性としての幻想を抱かせたまま、光源氏を末摘花のもとへ導くのである。

しかしながら、大輔命婦は光源氏の手引きをすることに対して「わづらはし」という思いを抱き〔末摘花〕①二六七頁）、一度は光源氏を導いて末摘花の琴を聞かせる〔末摘花〕①二六八―二七一頁）ものの、その後はなかなか積極的な動きを見せない。度重なる光源氏の催促によってようやく物越しの対面を決めたときにも、「御心につかずはさてやみねかし、またさるべきにて、仮にもおはし通はむを咎めたまふべき人なし」などと思ひ〔末摘花〕

①(二七九頁)、手引きした後に光源氏が気に入らなくても、一時的に通うようになったとしても、どちらでもよいと考える。光源氏を導くときに至っても、「わが常に責めたてまつる罪避りごことに、心苦しき人の御もの思ひや出で来むなど、やすからず思ひるたり」と考え(「未摘花」①二八二頁)、責任逃れのために光源氏を導いたものの、かえって姫君がかわいそうなことになるのではないかと案じるのであった。こうした命婦の心情からは、未摘花の行く末を心配しつつも、何とかして光源氏との繋がりを維持しようとする積極的な考えは見えず、両者に対して一歩引いた考えを抱いていることが大輔命婦の立場を示しているといえよう。大輔命婦は、未摘花に寄り添い続けるのでもなく、光源氏の意のままに動くのでもない、男女の恋愛の仲立ちとなる女房としては特異な存在であった。

大輔命婦が光源氏を未摘花の側に導き、光源氏から未摘花に歌を詠みかけた後には、大輔命婦ではなく、未摘花の乳母子である侍従が代わりに歌を返している。侍従は「はやりかなる若人」であるとされるが、「いと心もとなうかたはらいたし」と未摘花をいたわり、未摘花を助けるためのふるまいを見せるのである(「未摘花」①二八三頁)。こうした行動と心情は大輔命婦とは異なるものであり、未摘花の女房としての侍従のあり方が示されている。

光源氏が未摘花のもとに忍び入ることになって、大輔命婦は「知らず顔にてわが方へ往にけり」と素知らぬ顔をして自らの局に下がる様子が描かれ(「未摘花」①二八四頁)、手引きのみを自らの役割と心得ているようである。この後、大輔命婦は、未摘花からの正月の装束の贈り物を光源氏に届け、その返事の文を託された(「未摘花」①二九八〜三〇二頁)、光源氏が未摘花に送る正月の装束を届けたりはする(「未摘花」①三〇二頁)ものの、光源氏自身を未摘花のもとに導くことはなくなるのであった。

光源氏の乳母の娘であり、宮中に出仕する命婦であり、また、常陸宮邸に出入りする「わかむどほり」の兵部大輔の娘という大輔命婦の設定は、光源氏と未摘花を繋ぐうえでこのうえない立場の人物として造型されている。帝の皇子として生れて臣籍降下した光源氏と、常陸宮の娘として没落した宮家の窮状の中に置かれた女君を繋ぐためには、「わかむどほり」という両者に共通する出自を持つ女房が必要とされたのであろう。しかしながら、大輔命婦は光源氏と未摘花のどちらにも寄り添うことはなく、その役割を終えた後、物語から退場するのであった。

注(1) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、巻名、冊数、頁数を付す。また、私に傍線等を付す。以下、同じ。

- (2) 今井源衛「未摘花の造型」『今井源衛著作集第二巻 源氏物語登場人物論』笠間書院、二〇〇四年、一二二頁(初出…一九五五年九月)。
- (3) 白方勝「未摘花巻の構造―大輔の命婦を視点にして―」『源氏こぼれ草』二七、一九九三年五月。
- (4) 坂本共典「源氏と未摘花」森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年、二一九頁。
- (5) 陣野英則「女房の話しとその機能―「未摘花」巻の大輔命婦の場合―」『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版、二〇〇四年、九七頁(初出…一九九六年二月)。
- (6) 西郷信綱「色好みの遍歴」『源氏物語を読むために』平凡社、一九八三年。
- (7) 注(5)に同じ、一〇七頁。
- (8) 吉海直人「親類の女房」攷―乳母に比肩する女房―『日本文学』四九―三、二〇〇〇年三月。
- (9) 藤本勝義「明石姫君の乳母と夕顔の乳母」『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院、一九九四年(初出…一九八五年一〇月)。
- (10) 古田正幸「源氏物語」における乳母一族の系譜―大弐の乳母、惟光、藤典侍から六の君へ―『平安物語における侍女の研究』笠間書院、二〇一四年(初出…二〇〇九年六月)。
- (11) 吉海直人「乳母の歴史的展開」『平安朝の乳母達―「源氏物語」への階梯―』世界思想社、一九九五年。
- (12) 吉海直人「未摘花の乳母達」『平安朝の乳母達―「源氏物語」への階梯―』世界思想社、一九九五年、二二二頁。
- (13) 吉海直人「さしつぎ」はナンバー2か『源氏物語』の特殊表現』新典社、二〇一七年、一五五頁(初出…二〇〇七年三月)。
- (14) 中でも、角田文衛『日本の後宮』(学燈社、一九七三年)や加納重文「典侍考」『平安文学の環境 後宮・俗信・地理』和泉書院、二〇〇八年(初出…一九七九年八月)に詳しい。また、角田文衛『日本の後宮』所収の「主要官女表」(学燈社、一九七三年)や『平安時代史事典』資料・索引編所収の「日本古代後宮表」(角田文衛編・西井芳子増訂、角川書店、一九九四年)に平安朝の乳母・典侍等がまとめられている。
- (15) 角田文衛「後宮の変貌」『日本の後宮』学燈社、一九七三年、一八〇頁。
- (16) 「枕草子」の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、章段名、頁数を付す。
- (17) 『落窪物語』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、巻数、頁数を付す。
- (18) 高田祐彦は、浮舟の母の中將の君について、「父親を亡くして零落の身の上となり、叔母の八の宮北の方の縁をたよって宮家に仕えた」という経緯があったと想像できることを指摘し、「名門の血を引く者としての矜持」を見せることを論じる。「中將の君の身意識をめぐって―浮舟物語論の序章」『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三年、三八二頁(初出…一九九三年)。
- (19) 北啓太「兵部省」『国史大事典』(ジャパンナレッジ版)。
- (20) 日本思想大系「律令」職員令、一七二頁。
- (21) 日本思想大系「律令」官位令、一一八―一二九頁。
- (22) 『古事類苑』官位部十四兵部省、九〇六頁。
- (23) 日本思想大系「律令」職員令、補注、五二三頁。
- (24) 森田悌「兵部省」『平安時代史事典』(下)角川書店、二〇一一年。

- (25) 渡邊由紀『蜻蛉日記』上巻にみる兼家―「いとねぢけたるもの大輔」考―『大妻国文』三〇、一九九九年三月。
- (26) 藤原忠輔については、『御産部類記』には「兵部大輔藤原忠輔」とある(天元三年(九八〇)六月一日条)が、『公卿補任』では兵部大輔に任官されたことは確認できないため、人数には含まれていない。
- (27) 『蜻蛉日記』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、巻、年月、頁数を付す。以下、同じ。
- (28) 増田繁夫訳・注『かげろふ日記』(全対訳日本古典新書)創英社、一九九一年、六八頁。
- (29) 高橋照美「兼通と兼家の不和―「官位の劣り優り」の背景―」『立命館文学』六三〇、二〇一三年三月。
- (30) 『大鏡』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、頁数を付す。
- (31) 『うつほ物語』の引用は、室城秀之『うつほ物語全改訂版』(おふう、二〇〇一年)により、巻名、頁数を付す。
- (32) 竹内正彦「あはれ、衛門督」考―『源氏物語』における右衛門督をめぐって―『源氏物語の顕現』武蔵野書院、二〇〇二年、三五八頁(初出:二〇一七年三月)。
- (33) 秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解十五尾駁の駒」『解釈と鑑賞』二八一、一九六三年九月。
- (34) 注(25)に同じ。
- (35) 池田亀鑑『源氏物語事典』(下)東京堂出版、三九〇頁。
- (36) 渡邊由紀『蜻蛉日記』にみる章明親王―兵部卿宮についての一考察―『大妻女子大学大学院文学研究科論集』九、一九九九年三月。
- (37) 新編日本古典文学全集『源氏物語』「賢木」②一四三―一四四頁、頭注。
- (38) 注(35)に同じ、三五三―三五四頁。
- (39) 今井源衛「兵部卿宮―紫上の父」『今井源衛著作集第二巻源氏物語登場人物論』笠間書院、二〇〇四年(初出:一九五七年)。
- (40) 秋山虔「書評今井源衛著『源氏物語の研究』」(『源氏物語の世界―その方法と達成―』東京大学出版会、一九六四年(初出:一九六二年一月)、坂本昇「朝顔の生き方―親王の女(一)―」(『源氏物語構想論』明治書院、一九八一年)、藤本勝義「式部卿宮―「少女」巻の構造」(『源氏物語の想像力―史実と虚構』笠間書院、一九九四年(初出:一九八二年三月)、田坂憲二「鬚黒一族と式部卿宮家―源氏物語における〈政治の季節〉・その二―」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年(初出:一九九〇年)など。
- (41) 星山健「「真木柱」巻における式部卿宮像と為平親王―子息達の官位に着目して―」『王朝物語史論』引用の『源氏物語』―笠間書院、二〇〇八年、一二四頁(初出:二〇〇七年)。
- (42) 鷲山茂雄「螢兵部卿宮」『講座源氏物語の世界(第五集)』有斐閣、一九八一年、一五二頁。
- (43) 白井たつ子「『源氏物語』における「すき」の系譜―螢兵部卿宮を中心として―」『文芸研究』九四、一九八〇年五月。
- (44) 阿部好臣「螢兵部卿宮の位相」『語文』八三、一九九二年六月。
- (45) 久下裕利「兵部卿宮あるいは式部卿宮について―王朝物語官名形象論―」『論叢源氏物語2 歴史との往還』新典社、二〇〇〇年。
- (46) 拙論「源氏物語王命婦論―「賢木」巻における「いとほしがりきこゆ」の対象を起点として―」『玉藻』四九、二〇一五年二月。

- (47) 注(12)に同じ。
- (48) 清水好子「侍女たち」『源氏の女君増補版』塙書房、一九六七年。
- (49) 吉海直人「源氏物語」の乳母達」『平安朝の乳母達―源氏物語への階梯―』世界思想社、一九九五年。
- (50) 本居宣長「未摘花」『源氏物語玉の小櫛(本居宣長全集第四卷)』筑摩書房、一九六九年、三九七頁。
- (51) 萩原廣道『源氏物語評釈』「未摘花」櫻園書院、一九二六年、四二〇頁。
- (52) 玉上琢彌『源氏物語評釈第二卷』「未摘花」一七四頁、鑑賞。
- (53) 「兵部の大輔は宮家とよほど縁の深い人(未摘花の兄か)と考えられる」と指摘する(新潮日本古典集成『源氏物語』「未摘花」二四七頁、頭注)。
- (54) 注(4)に同じ、二二二頁。
- (55) 注(12)に同じ、二二三頁。
- (56) 新編日本古典文学全集頭注は、「兵部大輔は常陸宮の縁者らし」と指摘している(新編日本古典文学全集『源氏物語』「未摘花」②二六六頁、頭注)。
- (57) 注(39)に同じ、一〇六頁。
- (58) 松田豊子「源語常陸の表現映像―平安公卿の国司兼任―」『源氏物語の地名映像』風間書房、一九九四年、一八三頁(初出：一九八九年二月)。

(本学非常勤講師)